

テーマセッション

◆ 知的財産イノベーション研究の活性化に向けて ◆

■ 幹事分科会：知財学ゼミナール

【背景と概要】

日本知財学会 10 周年を記念した事業として、分科会の一つである知財学ゼミナールでは、書籍『知的財産イノベーション研究の展望』ならびに『知的財産イノベーション研究の諸相』を刊行いたします。知的財産の創造/保護/活用に関する制度・政策、知的財産の創造/保護/活用の実践に関わる組織のマネジメント、知的財産を活用したイノベーション創出のメカニズム等に関して、この先 10 年間で重要となるテーマ/研究領域を取り上げて、背景となる歴史と現状、そのテーマ/研究領域の重要性、先行研究やこれまでの研究成果を踏まえて、様々なタイプの論考・研究成果を紹介するとともに、今後を展望することを趣旨としております。今回のセッションでは、3 名の方々に、上記の書籍に掲載される論文の内容をご報告いただきます。

【発表内容と講演者（講師名は敬称略）】

北田 透：「経済学的手法により検証する存続期間と特許料に関する知財政策の展望」

現行特許制度は、特許権者の権利保護を図ることによって発明を促すと共に独占の弊害を許容するというトレードオフ問題の典型であるだけでなく、発明者は、発明費用を回収できるか分からないというリスクに直面している。本稿では、社会的効率性の観点から、現行特許制度における存続期間と特許料について、その政策的意義を検証すると共に、望ましい特許制度のあり方について提言を行うものである。

西尾 好司：「産学間共同研究の文献レビューと今後の研究の方向性」

共同研究は産学連携の重要な仕組みであるが、研究対象としてみる場合、情報の制約から研究を進める上で困難が多い。しかし最近では、共同研究プロジェクトを対象とする、様々なフレームや情報を活用した研究が行われるようになってきている。本稿は、産学間共同研究のケーススタディを中心とした先行研究のレビューを行い、自身の研究を踏まえて、今後 10 年の研究を展望するものである。

沙魚川 久史：「所有から利用へのパラダイムシフトに伴うサービスとデバイスの相互作用～サービスとデバイスが協働的価値形成を行うための知財マネジメントに関する考察～」

サービスとデバイス機器の協働に関して、サービス事業者とデバイス製造者それぞれの視点から事業形態と技術の変化を確認する。幾つかの事例を基に、サービスシステムの変遷についてサービスコンテンツの格納媒体となる「コンテナ」という概念を導入し、サービスの変容とデバイス機器の技術変化に伴いサービス事業者あるいはデバイス製造者が採り得る知財マネジメントに関して検討を行った。

隅藏 康一：司会およびモデレーター

テーマセッション

◆ 知的財産イノベーション研究の活性化に向けて ◆

【略歴】

○ 北田 透：国土交通省 都市局都市政策課 都市再生政策調整官。工学修士（京都大学）、公共経済学修士（政策研究大学院大学）。1994年京都大学大学院工学研究科建築学専攻修了。同年建設省入省後、国土庁、内閣府経済財政社会基盤担当参事官補佐、政策研究大学院大学派遣（知財プログラム専攻）、秋田県建設交通部次長、国土交通省住宅局建築指導課課長補佐などを経て2012年7月より現職。

○ 西尾 好司：株式会社富士通総研 経済研究所 主任研究員、東京大学研究推進課付特任研究員、日本工業大学技術経営専門職大学院教授。1998年富士通総研入社、2008年東北大学工学研究科終了（博士（工学））、2009-2011年大阪大学客員教授。研究・技術計画学会論文賞（2012年）。主な著書『特許流通ハンドブック』（松井・西尾・西村共編著、中央経済社、2006年）、『競争力強化に向けた産学官連携』（長平・西尾共編著、中央経済社、2006年）など。

○ 沙魚川 久史：東京理科大学 MOT。2001年セコム株式会社入社、本社技術管理室。東京理科大学総合科学技術経営研究科知財戦略専攻修了、東京大学イノベーションマネジメントスクール修了。2011年より独立行政法人科学技術振興機構（JST）研究開発戦略センター「電子情報通信分野俯瞰プロジェクト」「未来研究開発検討委員会」委員。

○ 隅藏 康一：文部科学省科学技術政策研究所 第二研究グループ 総括主任研究官／政策研究大学院大学 准教授。東京大学大学院工学系研究科修了（博士（工学））。東京大学先端科学技術研究センター助手をへて、2001年より政策研究大学院大学助教授、2007年より同准教授。2012年よりNISTEP 総括主任研究官。日本知財学会理事、研究・技術計画学会理事、知的財産マネジメント研究会（Smips）総合オーガナイザー。主な著書に『幹細胞の特許戦略』（隅藏・竹田編著、発明協会、2011年）、『知的財産政策とマネジメント』（隅藏編著、白桃書房、2008年）など。